



京大広報

No. 592

2004. 7

目次

〈大学の動き〉

- 博士学位授与式……………1738
- 2004新入学外国人留学生歓迎パーティの
開催……………1738
- 附属図書館に
「メディア・コモン」オープン……………1740
- 永年勤続者表彰式を挙……………1741

〈部局の動き〉

- 文学研究科附属ユーラシア文化研究センター
(羽田記念館) 看板除幕式および開設記念
シンポジウムの開催……………1741
- 生存圏研究所が開所記念行事を開催……………1742

〈寸言〉

- 60才近くになって思うこと 奥田邦夫……………1743

〈随想〉

- 地殻変動観測の昨今
名誉教授 田中寅夫……………1744

〈洛書〉

- 京大の探検活動 瀬戸口烈司……………1745

〈話題〉

- 京都大学未来フォーラム(第3回)を開催……………1746

〈栄誉〉

- 小寺秀俊教授が IBM Shared University
Research Award を受賞……………1746

〈訃報〉

- ……………1747

〈日誌〉

- ……………1748

〈お知らせ〉

- 文部科学省21世紀型革新的先端ライフサイエンス
技術開発プロジェクト Life Science 2004
公開シンポジウム……………1748
- 桂キャンパスへの工学研究科移転に伴う
本部構内の交通規制について……………1749
- 総合博物館春季企画展
『森と里と海つながり』
—京大フィールド研の挑戦—……………1750

〈編集後記〉

- ……………1750



2004新入学外国人留学生歓迎パーティ
—関連記事 本文 1738 ページ—

京都大学広報委員会
<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学の動き

博士学位授与式

5月24日（月）午前10時30分から、京都大学百周年時計台記念館において、尾池和夫総長、教学担当の副学長をはじめ、各研究科長・学舎長出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

尾池総長から、各授与者に対し学位記（5月24日付）が手渡された後、総長の式辞があり、午前11時10分終了した。



各分野別内訳は次のとおりである。

総長式辞は総長室ホームページをご覧ください。

URL <http://www.kyoto-u.ac.jp/top2/01-top.htm>

学 位	課程博士	論文博士	計
博士（文 学）	2	0	2
博士（教 育 学）	1	1	2
博士（法 学）	2	0	2
博士（経 済 学）	1	2	3
博士（理 学）	12	3	15
博士（医 学）	8	1	9
博士（社会健康医学）	0	0	0
博士（薬 学）	0	3	3
博士（工 学）	3	3	6
博士（農 学）	7	4	11
博士（人間・環境学）	1	1	2
博士（エネルギー科学）	0	0	0
博士（地 域 研 究）	1	0	1
博士（情 報 学）	3	0	3
博士（生 命 科 学）	2	0	2
計	43	18	61

2004新入学外国人留学生歓迎パーティの開催

総長主催による新入学外国人留学生歓迎パーティが5月25日（火）午後6時30分より、京都大学百周年時計台記念館 国際交流ホールにおいて開催された。



歓迎パーティには、尾池和夫総長、国際交流担当の副学長をはじめ、部局長ならびに指導教員等の学内関係者が出席した。また来賓として京都府、京都市・大学コンソーシアム等の国際交流関係者が招待され、新入学留学生を囲んで和やかに交流が行われた。

パーティは、尾池総長の歓迎挨拶、新入学留学生を代表してメキシコから来日し、日本語予備教育



を受講している Salvador Rivera Chequer 〈サルバドル リベラ チェケル〉さんの日本語および英語によるスピーチ，入倉孝次郎副学長の乾杯で始まった。

また，パーティでは京都大学の交響楽団および吹奏楽団による演奏と，留学生による母国の歌なども

披露され，留学生も楽しみながら歓迎ムードを一層盛り上げた。

なお，平成16年5月1日現在の本学の国（地域）別外国人留学生数は次のとおりである。

国（地域）別外国人留学生数

(平成16年5月1日現在)

地域	区分 国名等	学 部		大 学 院			研究 生等	計
		学生	聴講生	修士課程	博士課程	聴講生		
ア ジ ア 州 (27)	バハレーン				1			1
	バングラディシュ			1	14		2	17
	カンボディア	2		2	1			5
	中 国	87	2	147	160		94	490
	キプロス						2	2
	香 港	1			1		1	3
	イ ン ド					4	1	5
	インドネシア			5	27		4	36
	イ ラ ン			1	7		2	10
	イスラエル			2	4			6
	ヨ ル ダ ン			1				1
	パレスチナ				1			1
	韓 国	29	7	34	106	2	22	200
	ラ オ ス			1	1			2
	マレーシア	1		3	7		5	16
	モンゴル	8		6	3		2	19
	ミャンマー			1			1	2
	ネパール			1	4			5
	パキスタン				5		2	7
	フィリピン	1		6	8		2	17
	シンガポール						1	1
	スリランカ	1		1	2			4
	シ リ ア						1	1
	台 湾	1		22	28		15	66
	タ イ	5	1	10	33	1	9	59
	トルコ			1	5		1	7
	ヴェトナム	12		6	12		6	36
大洋州 (3)	オーストラリア	1	4	2	2		3	12
	ニュージーランド	1			3			4
	ト ン ガ				1			1
ア フ リ カ 州 (8)	アルジェリア				2			2
	エジプト			1	4			5
	ガーナ						1	1
	ケニア				2		1	3
	モロッコ				2			2
	ナイジェリア				1		1	2
	スーダン				2			2
	タンザニア				2			2

地域	区分 国名等	学 部		大 学 院			研究 生等	計
		学生	聴講生	修士課程	博士課程	聴講生		
ヨ ロ ッ パ 州 (23)	オーストリア		1		1			2
	ベルギー				2		2	4
	ブルガリア	2		2			2	6
	チェッコ				1		1	2
	デンマーク						2	2
	エストニア				1			1
	フィンランド						1	1
	フランス		7	3	6	1	3	20
	ドイツ		6		4	2	4	16
	ギリシア				1			1
	ハンガリー	1	1	1	3		3	9
	アイルランド						1	1
	イタリア						1	1
	オランダ		2				1	3
	ポーランド			1	2		2	5
	ポルトガル		1	1			1	3
	ルーマニア			2	4			6
	セルビア・モンテネグロ						1	1
	スロヴァキア				1		1	2
	スベイン			1	1		2	4
	スウェーデン		2			2		4
	スイス		5				2	7
	連合王国(英国)			1	1		3	5
N I S 諸 国 (4)	ベラルーシ				1			1
	キルギスタン			1				1
	ロシア			5	2		3	10
	ウクライナ						1	1
北 ア メ リ カ 州 (5)	カナダ		3	3	1			7
	ホンデュラス			2	1			3
	メキシコ			1	2		1	4
	パナマ			1			1	2
	アメリカ合衆国		4	3	7	2	13	29
南 ア メ リ カ 州 (6)	アルゼンティン	1			1		1	3
	ボリビア						1	1
	ブラジル			9	9		2	20
	チリ						1	1
	コロンビア	1			2		3	6
	ペルー			1	1		1	3
計	(76カ国)	155	46	292	510	10	240	1,253

※総数1,253名中，留学ビザ留学生は1,240名

附属図書館に「メディア・コモン」オープン

附属図書館に、映像や音楽が楽しめる「メディア・コモン」が誕生した。

5月26日（水）午前10時30分、尾池和夫総長、金田章裕、本間政雄両副学長、原 潔監事、50インチのプラズマ・ディスプレイ4台を寄附していただいたパイオニア株式会社総合研究所次長の横川文彦氏をはじめ関係者の列席を得て、オープニング・セレモニーが行われた。

「メディア・コモン」は、DVDをはじめ多種のメディアに対応できるように構想され、勉学や研究に必要な映像や音声情報を活用できるほか、学生や教職員が読書や勉強で疲れた頭を音楽や映像でリフレッシュすることができる。ガラス張りの広さ240平米のスペースに、DVDやビデオが観られる4人用個人ブースが4つ、窓越しに時計台や吉田山を見ながらCDやカセットテープを聞くことのできる2人用ソファが4つ、DVDで映画など50インチの大型プラズマ・ディスプレイ画面で迫力ある映像を楽しむことのできる4人用AVコーナーが2箇所など合計32席がある他、さらに5.1チャンネルスピーカーを装備したメディア・シアター（防音装置付き、10席）などがゆったりとした空間に配置されている。



文学部卒業生の故片田清氏寄贈のCDコレクション4,870枚のほか、DVDが約250点（映画、ドキュメンタリー、音楽）、ビデオが約760点（ドキュメンタリー、言語）などが置かれている。開室時間は、平日午前9時から午後9時、土日祝日が午前10時から午後4時までとなっている。

利用についての詳細は附属図書館ホームページをご覧ください。

URL <http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/guide/jpn/mediacommon.html>



永年勤続者表彰式を挙行

永年勤続者表彰式が6月21日（月）午後4時30分から京都大学百周年時計台記念館において、尾池和



夫総長、本間政雄理事、被表彰者106名（20年表彰44名、30年表彰62名）、部局長、事務長等45名の出席のもと開催された。

表彰式では、尾池総長から、被表彰者代表の長坂みどり附属図書館情報サービス課長に表彰状及び記念品が授与された後、被表彰者の永年の勤労に感謝する祝辞が述べられた。続いて、被表彰者代表から答辞が述べられ、厳かな雰囲気の中で終了した。

総長式辞は総長室ホームページをご覧ください。

URL <http://www.kyoto-u.ac.jp/top2/01-top.htm>

部局の動き

文学研究科附属ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）看板除幕式および開設記念シンポジウムの開催

京都市北区の上賀茂にある文学研究科の羽田記念館内陸アジア研究施設の研究活動は、国内外で高く評価されてきた。本年4月に、内陸アジアという限定された地域から中央ユーラシアを中心とするユーラシア全域の歴史・言語・宗教を対象に研究活動を拡大するため、文学研究科附属のユーラシア文化研究センターに改組・転換し、その看板除幕式と開設記念シンポジウムが5月15日（土）に行われた。

看板除幕式は、関係教職員ほか多数の来館者の見守る中、尾池和夫総長、藤井讓治文学研究科長、紀平英作前研究科長、庄垣内正弘センター長により行われた。

記念シンポジウムでは、140名を超える多くの参加者を得て、「京都大学における中央ユーラシア研究の軌跡－歴史・考古・言語－」を題目とし、間野英二、竺沙雅章、小野山節、西田龍雄の各名誉教授を

講師に、くつろいだ雰囲気の中、各専門分野の発展の歴史と現在の研究状況さらに将来の展望についてエピソードなどをまじえながら熱心に論じられた。シンポジウムに続いて行われた懇親会でも同センターの今後の研究活動について語られ、盛況のうちに終了した。

（大学院文学研究科）



生存圏研究所が開所記念行事を開催

生存圏研究所が本年4月に発足したことを記念して、6月9日（水）午後、京都大学百周年時計台記念館において、学内外関係者約350名の参加を得て、記念行事が開催された。

まず、午後2時より行われた記念講演会では、松本 紘生存圏研究所長より、生存圏研究所の概要について説明があり、続いて尾池和夫総長より「生存圏研究所に寄せる期待」と題して、「生存圏科学」という新しい研究領域の開拓に向け強い期待が述べられた。最後に、佐藤哲也海洋研究開発機構・地球シミュレータセンター長より、「生存圏科学と地球シミュレータ」というタイトルで、センターの超高速シミュレータを用いた生存圏研究所との共同研究の概要ならびに生存圏科学の将来の方向性について示唆に富んだ講演が行われた。



生存圏研究所開所記念式典

引き続き午後4時30分より行われた開所記念式典では、松本所長により生存圏研究所の開所にいたる経緯について説明があり、尾池総長による祝辞挨拶に続いて、来賓の小山晴己文部科学省研究振興局学術機関課課長補佐からご挨拶、富田文一郎筑波大学教授および入倉孝次郎副学長から祝辞が述べられ、国内外から寄せられた多数の祝電が披露された。



式辞を述べる松本所長

式典終了後、会場を国際交流ホールに移して祝賀会が開催された。松本所長による挨拶の後、金田章裕副学長より祝辞が述べられ、長尾 真前総長による乾杯の発声の後鏡開きが行われ、富田筑波大学教授によるエールが飛び出すなど、終始和やかに懇談が行われた。



長尾前総長による乾杯

生存圏研究所の概要・研究内容等は生存圏研究所のホームページをご覧ください。

URL <http://www.rish.kyoto-u.ac.jp>

(生存圏研究所)

寸言

60才近くになって思うこと

奥田 邦夫



私は、昭和39年に法学部に入学しました。昭和35年には池田内閣が所得倍増論を唱えて頑張っていました。生協のカレーが35円、故郷の長崎に帰省するのに前の晩から並ばないと寝台車が取れない時代で、学生はほとんどが下宿でした。しかし、学生生活は、誰もがそうであるように非常に快適で、大学生活は経験すべきものだなと思っていました。

一般大学のクラス同窓会が札幌であり、約半数が参加しました。仲間と小樽の町を歩きながら、たまたま大学で出会って同じクラスになり、生きながらえて何十年か後に北海道でこうして一緒に歩くというのは、何か不思議な感じがしたので、皆に聞いてみたところ皆さんそのような感じでした。50名の内これまで4名が亡くなりましたが、60才まで生きれば一応は良いのかなと思ってます。

話題は学生時代のことが多い中で、現在の景気の話になり、日本経済の現状を作りだしたのは我々の年代の責任だという者がいました。私は、狭い法曹界に身を置き、何か事が起きた後の始末という後ろ向きな仕事ばかりしてきたので、あまりそういうことを考えたことはありませんでしたが、年齢的には確かに俺たちの年代の責任だと思いました。

私は、若い頃は、環境がどうのこうの、オゾン層が破壊されつつある、温度が上昇しているなどと言われても、自分が生きている間には関係ないと思いきなり関心がありませんでしたが、60才近くになると、そのような考えではいけないのだと自分に言い聞かせるようになりました。

最近テレビで出生率が1.3になったと放映していましたが、これを見て、私の知り合いが、自分の娘（既婚）は、子どもを作ろうとしない、自分も孫は要らない、今の世の中は、孫が生まれても先でどうなるか分からない、というようなことを言っていたのを思い出しました。一人の力は小さいので、何が

出来るわけでもありませんが、人間一人一人が、環境問題が重要なことであることを明確に認識し、次世代により良い環境を残すべく努力すべきであると自分に言い聞かせております。

自動車は、環境にやさしいという部分的に電気を使用する車に乗っていますが、平均リッター当たり20キロも走行するので、ガソリンが通常車の約1/3で済みます。このような車がどんどん普及するとガソリンの消費量が大幅に減り、その分少しでも地球の環境が守られることになる訳です。

私は、学生時代、人間は精神的にはずっと成長していくもので、60才くらいになると人間的にはかなり成長するものと思っていました（教授陣をはじめ当時年を取られた方はそのように見えました）。

しかし、自分が60才近くになると、学生時代から精神的には少しも進歩せず、ただ、肉体だけが衰えていっているのに気が付きました。私が、同窓会でそういう話をしたところ、皆さん、そのとおりでいうことで、このことはかなり普遍的なことではないかと思っています。

ということは、大学生時代というのは、学問を修めることの他に、自己を形成する上で、非常に大切な時期でもあるということです。友と大いに語り合いましょう。

国立大学も、変動する21世紀に対応すべく、先進国並みに独立法人化され、これまでの枠を超え飛躍的に発展しようとしています。

学生は学問を学ぶことが本業なので、京都大学という恵まれた環境の中で大いに学ぶべきであるし、大いに学ばないと損だと思います。人間は遊ばないと勉強も仕事も出来ないもので、よく遊ぶことも大切になります。

（おくだ くにお 弁護士 昭和45年法学部卒）

随想

地殻変動観測の昨今

名誉教授 田中 寅夫

国土地理院のホームページを開いてご覧になると、最近の話題ということで、「東海地方の地殻変動」という項目のなかに「非正常地殻変動の分布」というページがあって2000年の夏頃から東海地域の西部で、国土地理院のGPS観測結果に以前とは傾向の異なる変化が現われており、現在も依然として継続しているように見えると報告されています。東海地方から名古屋付近にかけての地域が南東方向にこの3年間で5cm程度移動し、浜名湖付近を中心として4cmの隆起がみられます。大きな地震が起こるでもなく、普段の状況のもとで限られた地域的に見出されるこの種の地殻変動は関係者の大きな関心を惹き、「非正常地殻変動（スロー・イベント）」と呼ばれています。



ところで、ドライブをなさる方であればおなじみのカーナビは本当に便利なものであり、知らないところへ行く場合でも、行く先を入力すると画面には車の位置がしめされて自分の車がどこをどちらの方向に走っているかがわかり、目的地までは音声で指図され道に迷うことはありません。これはご存知のようにGPS（Global Positioning System：全地球測位システムの略）と呼ばれる技術を使って、衛星からの電波を受信して車の位置と速度を時々刻々計算した結果を地図上に示す装置です。GPS衛星は1978年から打ち上げが始められて1993年に完成したもので、現在29機が打ち上げられています。カーナビでは、GPS衛星の軌道上での位置を基準にして地上での位置が決められており、10m程度の誤差が生じます。けれども道路の幅程度に誤差がおさまっていれば実用上問題はありません。

これに対して、ある地点を基準にとってそこから測った相対な位置、すなわちベクトルを求めるということであれば、現実問題として生じるさまざまな誤差を相殺できるためにその精度は格段に向上しま

す。その結果、上に述べたような「スロー・イベント」が検出できます。当初は測定誤差ではないかと筆者も疑ってみたりもしました。果たしてこの変動がどうなるのか、次の東海地震、東南海地震に続くのかなどと心配もされますが、以後3年経った現在でも別に沈静化する気配もなく継続しているように見えます。

このGPSはもともと米国の軍事技術であり、わが国にもたらされて測量などへの応用に使われ始めたのは1984年ころで、それまでは旧来の三角測量や1965年頃には電磁波を利用した距離測量、例えば10数キロはなれた場所に設置した反射鏡へレーザ光を当てて、光の往復時間から距離を正確に測定する「辺長（光波）測量」が地殻変動の観測に使われていました。私たちは京都市周辺の地殻変動を測定するために、当時として精度が高く簡便に実施できる「光波測量」を反復することを計画し、そのための何本かの「基線」を構成するための場所を探していました。

ちょうど当時、この話を聞かれた尾池総長（当時防災研）は、宇治御蔵山に鉄筋2階建ての新居を建設されており、もし私たちが「光波測量」を行うのなら、「屋上に特別の測点を作ろうか？」という願ってもないお話をもち出された。これは公私混同ではないかとも考えましたが、花山天文台と対をなすべき測点を尾池邸の屋上に作っていただきました。ちなみに尾池総長はこの「光波測量」だけではなく、自宅にアンテナや記録計をおいて電磁波の観測などもなされており、当時から多方面に科学者としての広い関心対象を持っておられました。

その後GPSの時代を迎えて、私たちの初体験である東海地域の「スロー・イベント」が今後どのように展開していくのか大変興味深いと同時に気になるこの頃であります。

（たなか とらお 元防災研究所教授 平成11年退官 専門は測地学）

洛書

京大の探検活動

瀬戸口 烈司



1964年に海外渡航の制限が撤廃された。若者は大挙してアジア、ヨーロッパ、アメリカへと旅だった。ヒッチ（ヒッチ・ハイクで旅する）という造語が生まれたのもこのころである。

それ以前は、若者が海外に自由に行ける状況にはなかった。教育活動の一環として、大学教授が引率するなら、渡航がみとめられた。このような環境を合法化する手段として、日本ではじめて学生団体の「探検部」が京大に誕生した。1956年のことである。

教官を隊長にすえて学術調査隊を結成し、そして海外へと出かけていった。イラン、東ヒンズークシ（1956）、スワート・ヒンズークシ、ネパール（1957）、トンガ（1960）、チモール、モルディブ（1961）、カンボジャ、カナダ（1962）、ニューギニア、ボルネオ（1963）、アンデス・パタゴニア（1968）、中国（1975）などが、探検部のおもな活動の履歴である。学生が主体の隊でありながら、学術調査隊を名乗らなければならなかったのである。

海外渡航が自由化されてほどなく、本多勝一はある座談会を招集した。本多は京大に探検部を誕生させた立役者で、このときすでに朝日新聞記者として、『カナダ・エスキモー』、『ニューギニア高地人』、『アラビア遊牧民』のルポを完成させていた。招集されたのは、京大、早稲田大、東京農大の探検部、東京都立大の山岳部の学生で、海外での活動の経験者である。本多の責任編集で座談会はまとめられ、「探検（海外活動）は大衆化したのが、日本の社会ではそのエネルギーを正しく方向づけるための条件が、まだととのっていない」と結論された（朝日ジャーナル、1967年、1月1日号）。

京大のサル学のレベルの高さが評価され、1961年に宮地伝三郎を代表者にしたロックフェラー財団の基金による日印合同サル類調査隊が発足した。本多とともに探検部の創設に参画した吉場健二がこれに参加している。フォード財団の基金援助を契機に、

1965年に東南アジア研究センターが京大に設置された。

私は本多の記事を同意できないな、と思いつつ読んだことを覚えている。京大こそ、探検の場ではないか。京大にはそのエネルギーを正しく方向づけるための条件がととのっているのではないか。

1967年に私は東南アジア研究センターの助手となり、翌年にフォード財団からの委任経理金でタイに調査に旅立った。同年、伊谷純一郎はヴェンナーグレン人類学研究財団の基金でアフリカ類人猿調査を実施している。経済の高度成長期以前にあっては、京大の研究者もけっこう外国の基金にたよって調査をおこなっていたのである。

京大では、1967年に霊長類研究所、1986年にアフリカ地域研究センター、1990年に生態学研究センターが設置され、海外調査の拠点を形成した。京大は野外研究の牙城なのである。

1963年から、文部省（当時）科学研究費補助金の枠のなかに、海外学術調査の項がもうけられた。初年度は7件が採択されたが、うち2件は京大が主体である。水野清一と今西錦司の調査隊であった。

この海外学術調査の総枠（基金の総額と採択件数）は年々着実にふえ続けた。1980年代の概算要求のマイナス・シーリングの時期にあっては、この枠は膨張を続けた。1990年には200件、2000年には500件以上が実施に移されている。全体の1割ほどを、京大の調査隊がしめている。海外調査は大衆化したのである。

では、現代の探検を支えるのは誰か。同名のタイトルで本多は2003年に、『週間金曜日』紙上で9月から5回にわたって連載をしている。3大別すれば、大学人、ジャーナリスト、企業の戦士となる。そのなかにあつて、大学人がもっとも自由人としてふるまえるのではなからうか。

いまの私の興味は、法人化の動きが探検活動に何かしらの影響があるのかどうかにある。

（せとぐち たけし 理学研究科教授、探検部長）

話題

京都大学未来フォーラム（第3回）を開催

京都大学では、大学と社会との協力・連携を一層深めるため、企業や官庁、国際機関、NGO、大学・研究機関、マスメディア、文化・芸術など様々な分野で活躍する卒業生を迎えて、講演と意見交換を行う京都大学未来フォーラムを、百周年時計台記念館・百周年記念ホールにおいて開催している。

第3回目の今回は、5月20日（木）夕刻に法学部卒業で、東京地検特捜部検事、法務省大臣官房長を歴任され、現在は、弁護士、さわやか福祉財団理事長として活躍されている堀田 力氏を講師に招き、本間政雄副学長の挨拶の後、「未来のために、どれだけ自分を生かすか」と題して講演が行われた。

講演では「平和」をキーワードとして、日本を取り巻く社会環境の変化について、宇宙からの視点、地球からの視点、日本からの視点、戦争と平和という視点でお話があり、日本が直面している少子高齢化の問題や年金問題など多くの課題と社会環境の変化が無縁ではないことが述べられた。また、世界の先進国の中で最も早く少子高齢化時代を迎える日本が、自分も大切にすることと同様に他の人も大切に



する本当の個人主義の確立、高齢者の方も能力に応じて働ける仕組みを確立すること、この課題を克服することにより日本が世界に貢献できることを述べられるとともに、若い方に教育や福祉など人を喜ばすことのできる分野に挑戦していただきたいと語られた。

聴講した学生、教職員、一般市民の方々170名は数々の経験を踏まえた講演に真剣に聞き入り、講演終了後は参加者から、堀田氏の行動の原動力、子供の教育に対する高齢者の関わりなど熱心な質問が相次ぎ、有意義なフォーラムとなった。

栄誉

小寺秀俊教授が IBM Shared University Research Award を受賞

小寺秀俊工学研究科教授（機械工学専攻）が、IBM Shared University Research (SUR) Award を受賞され、去る5月21日（金）に総長室において贈呈式が行われた。

受賞対象となった「Implantable Hospital Device（身に付ける病院）」は、マイクロマシンの研究の1分野であるマイクロTAS (Total Analysis Systems) と呼ばれるマイクロマシンを利用した医療用デバイスの応用研究で、その先進性と将来性、特に医学と工学の学際的融合を図っている点が評価された。マイクロTASは、分析機器を小型化したもので、すべてのコンポーネントがマイクロマシンから構成されているため、小型で軽量かつ物質の検出を短時間で



行うことができる利点を兼ね備えている。このため、人体に直接取り付けることができる、いわゆる「Implantable Hospital Device」を実現することが可能となる。大学における研究成果をもとに、医学

研究科や関連企業と連携し、癌や生活習慣病を微量の血液から分析することができるシステムの研究開発を行っている。

小寺教授は、昭和55年京都大学工学部を卒業後、同大学大学院修士課程を修了され、松下電器産業株式会社勤務、京都大学大学院工学研究科助教授を経て、平成12年教授に就任され、機械システム工学講座を担任されている。この間、平成8年に日本機械学会賞、同15年に精密工学会高城賞等を受賞された。

今回の受賞により、IBM社からPCやワークステーションなど、合計185台が贈呈され、受賞対象となった研究を含む医工連携研究プロジェクトである、ナノメディシンの研究や細胞生体機能シミュレーションプロジェクトなどに使用される。“Implantable Hospital”プロジェクトの更なる発展が期待される。

(大学院工学研究科)

訃報

このたび、井上 いのうえ 健 たけし 名誉教授、村西 むらにし 直美 なおみ 医学部附属病院技術職員が逝去されました。ここに、謹んで哀悼の意を表します。以下に両氏の略歴、業績等を紹介いたします。

井上 健 名誉教授



井上 健先生は、6月3日逝去された。享年83。

先生は、昭和16年に京都帝国大学理学部物理学科を卒業後、同部副手、名古屋帝国大学理学部講師、京都大学化学研究所助教授、同理学部助教授を経て、昭和40年教養部教授に就任された。この間、基礎物理学研究所助教授、教授、理学部教授も併任された。

昭和59年に停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

教養部在任中、昭和45年度に京都大学評議員、同

46年度ならびに同54年度に教養部長を務められ、京都大学と教養部の管理運営に多大な貢献をされた。とりわけ教養部改善検討委員長を歴任して教養部改組の端緒を拓くための理念形成を指導され、今日の総合人間学部と人間・環境学研究科の礎を築かれた。

先生の専門は理論物理学・素粒子論であって、二中間子論、非局所場理論の構築発展に貢献されたとともに、先生は物理学のみならず科学全般にわたって造詣が深く、科学史、科学思想に至るまで広い見識を備えられた科学者・教育者であった。多方面にわたる著書、翻訳書を多数出版され、若手研究者の育成に尽くされた。

(大学院人間・環境研究科)

村西 直美 医学部附属病院技術職員



村西直美氏は、6月18日逝去された。享年58。

同氏は、昭和43年8月から結核胸部疾患研究所附属病院看護部、平成10年4月から医学部附属病院看護部に勤務さ

れ、35年余りの永きにわたって呼吸器疾患看護業務に尽力された。

(医学部附属病院)

日誌 2004.5.1 ~ 5.31

5月7日	環境・安全・衛生委員会	20日	企画委員会
10日	学生部委員会		シンガポール Philip Yeo 科学技術長官他 5 名
11日	教育研究評議会		来学, 総長他と懇談
	大学評価委員会	24日	役員会
	部局長会議		博士学位授与式
12日	入学者選抜方法研究委員会	25日	財務委員会
14日	企画委員会		部局長会議
17日	役員会		企画委員会
18日	財務委員会	26日	全学共通教育システム委員会
19日	施設整備委員会	28日	企画委員会
	総長選考会議	31日	役員会
	国際交流会館委員会		
	国際交流委員会		

お知らせ

文部科学省21世紀型革新的先端ライフサイエンス技術開発プロジェクト Life Science 2004 公開シンポジウム 動的インタラクションによるコミュニケーション創発機構の構成と解明

1. 日 時：9月11日（土） 講演 13:00~15:00
ポスターセッション 15:00~17:00
2. 場 所：京都大学百周年時計台記念館
3. 演題及び講師：講演 乾 敏郎（京都大学・プロジェクトリーダー）
「コミュニケーション創発機構の構成と解明」
浅田 稔（大阪大学）
「身体認知科学的手法によるコミュニケーションの創発と理解」
合原 一幸（東京大学）
「脳の動的数理モデル構築とその応用」
ポスターセッション：「ノンバーバルコミュニケーションの創発を考える」
4. 定 員：先着順300名まで
5. 受 講 料：無料
6. 申 込 方 法：不要
7. 問い合わせ先：情報学研究科知能情報学専攻 TEL 753-3148
URL <http://www.cog.ist.i.kyoto-u.ac.jp/~miyatsuji/lifescience2004/>

桂キャンパスへの工学研究科移転に伴う本部構内の交通規制について

本部等構内交通委員会

大学院工学研究科建築学専攻と事務部が、9月6日（月）から9月中旬にかけて、桂キャンパスに移転します。

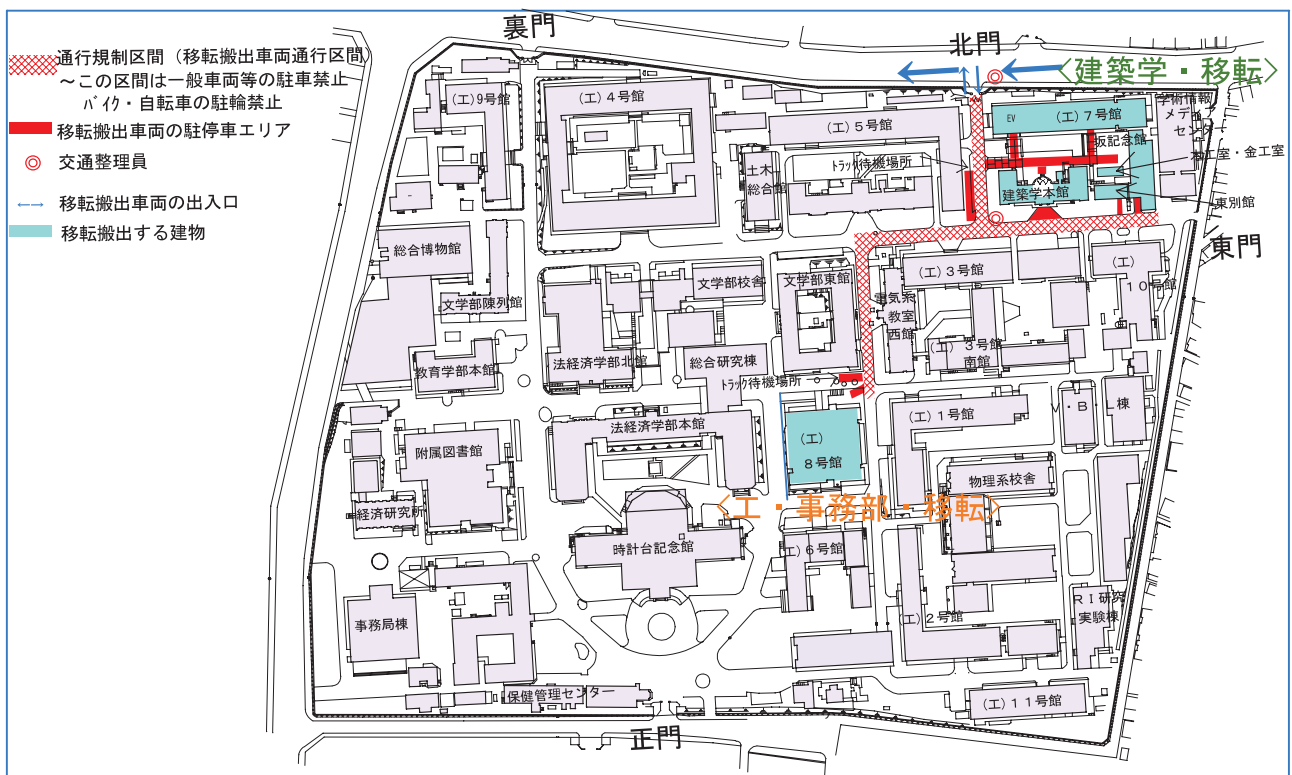
この移転による物品等の搬出に伴い、次のとおり、本部構内の交通規制が行われます。教職員、学生及び一般の方々には、通行等ご不便をおかけすることとなりますが、ご理解とご協力をお願いいたします。

なお、この移転に伴う交通規制により、本部構内の駐車スペースが減少しますので、教職員及び学生においては、自家用自動車による通勤・通学を極力自粛されるよう強く要請いたします。

<建築学専攻・事務部移転時期 9月6日～9月中旬>

- ・移転トラック等車両は、北門から入出構する。
- ・移転トラック等車両が走行する、建築学建物の構内周囲道路及び、建築学本館から工学部8号館北側出入口への構内道路は、“駐車・駐輪禁止区域”とする。（同禁止区域での一般車両・自転車等の走行や歩行者通行は可。）（事務部移転の完了後、事務部エリアの交通規制は解除。）
- ・工学部5号館東側のバイク専用置き場は、移転期間中、移転トラック等車両の待機場所とする。
- ・建築学建物の中庭等に駐輪している自転車・バイクは、地球系建物中庭の駐輪場へ移動する。
- ・北門出入口等に交通整理員を配置し、車両・歩行者等の交通安全誘導を行う。

建築学専攻・（工）事務部移転 [9月6日（月）～9月中旬（17日（金）） 予定]



◆ 総合博物館春季企画展 ◆
『森と里と海のつながり』
—京大フィールド研の挑戦—

「森は海の恋人」の世界へのいざない

巨木がたたずむ豊かな森、

アユが踊る清流の里、生命あふれる渚の満ち干。

私達日本人の心のふるさととは、どこへ行ってしまったのでしょうか。

森と里と海のつながりは、日本と世界の未来の子供達の財産です。

京都大学は平成15年4月に

フィールド科学教育研究センターを設置し

森と里と海のつながりを再生させる

新たな科学の誕生に挑戦しています。

それは、「森は海の恋人」運動とも連携して、

私達自身の心の中に“森や海”を築く挑戦でもあります。

さあ森と里と海のつながりの世界を散策してください。

この展覧会は、平成16年総合博物館春季企画展として、下記のとおり開催しております。

会 場：京都大学総合博物館 第2企画展示室（南棟2F）

会 期：6月2日（水）～8月29日（日）

開館時間：午前9時30分～午後4時30分＜入館は午後4時まで＞

入 館 料：一般400円 大・高校生300円 中・小学生200円

休 館 日：月曜日・火曜日（但し、8月17日（火）は臨時開館）



編集後記

法人化から3ヶ月あまり。大学を取り巻く変化の波は京大をも様変わりさせようとしています。変化にうといといわれる私でも、授業や会議、研究助成の報告書や申請書の締め切りに交互に追われているうちにもう夏を迎えてしまった、という感じです。今夏ベランダ栽培初挑戦のミニトマトがいつのまにか黄色い花をつけていました。自然にはそれぞれにそれぞれの時があるといいますが、人間にはなかなかその然るべき時なるものを見極めることは難しいようです。「善は急げ」か、それとも「急がば回れ」か、その狭間で頭をめぐらす時間が、実は文化や教養を培ってきたのかもしれないな、などとふと思われれます。日々の忙しさにかまけているうちに、そんな頭のめぐらし方を忘れていたような気がします。まずは、トマトの花でも眺めながら、実がなる時を心待ちにぼおっと過ごしてみようかしらと思うこのごろです。

（鈴木記）